2024年2月11日礼拝説教要約

ローマ人への手紙に聴く㉔

「主の御名を呼び求める者は」

（ローマ10・5～21）

一、律法による義と信仰による義

旧約聖書からは罪について大切なことを教えられます。旧約から教えられるのは、神は罪の問題が解決されるために、指定された動物の犠牲を献げるように語られたことです。人の罪が赦されるために、動物が犠牲になるという儀式です。これによって、旧約の人々は常に罪の意識を持つようになりました。ところが、聖書が語るイスラエルの歴史は、不信仰そのものでした。そうであってもアブラハム以来、主イエス・キリストが誕生するまで2千年以上の期間がありましたから、聖なる神との関係において罪があるという意識が身に付いたわけです。ですが、イエス時代のユダヤ人たちは、律法に忠実に歩もうとするあまり、「律法による自分自身の義」という考えが身に付いていました。5節に**〈モーセは、律法による義について、「律法の掟を行う人は、その掟によって生きる」と書いています。〉**とありますが、当時のユダヤ人は、律法による自己の義を追い求めました。パウロも、律法による自己の義を追い求め、自信満々に生きていました。ですが、イエス・キリストに出会うことによって変えられました。こうして、イエス・キリストを信じることによる義を宣べ伝えるようになりました。キリストを信じることによって義とされる、言い換えるなら「救われる」のが、律法を超える神のことばと知ったからです。パウロは力説しています。6節です。**〈しかし、信仰による義はこう言います。「あなたは心の中で、『だれが天に上るのか』と言ってはならない。」それはキリストを引き降ろすことです。〉**がそうです。申命記からの引用です。**〈だれが天に上るのか〉**とは、当時のユダヤ人が目指していたもので、律法のことばを落ち度なく行うことによって義とされる、すなわち、救われるという考え方です。**〈キリストを引き降ろす〉**とは、キリストが天から降られた御子、すなわち神御自身であることを否定することだと、解き明かしています。続いて7節です。**〈また、「『だれが深みに下るのか』と言ってはならない。」それはキリストを死者の中から引き上げることです。〉**とあります。なぜでしょうか。キリストが私たちの罪を引き受け、罪人となって死なれ、葬られ、陰府にくだられたからです。さらにパウロは語ります。8節です。**〈10・8〉**と。これも、申命記からの引用です。申命記において「みことば」は「律法」ですが、パウロは「キリストの福音」として語っています。

二、御名を呼び求める者は

9節、10節をご覧ください。**〈10・9～10〉**とあります。10章は、パウロがイスラエルの救いについて語っていますので、まずはユダヤ人に語っていると受け止めてください。ユダヤ人は、すなわちイスラエルは特別だから、イエスをメシア（＝キリスト）と信じなくても救われると考えるのはまちがいです。だれであっても、イエスをキリストと信じる者が救われます。これを押さえておかなければなりません。11節を見てまいります。**〈10・11〉**とあります。**〈聖書はこう言っています〉**とありますが、どこに書かれているのでしょうか。イザヤ書です。「この方」とは、イザヤ書においては神です。パウロは、「主イエス・キリストに信頼する者は、だれも失望させられることがない」の意味で解き明かしています。12節を見てまいります。**〈10・12〉**とあります。**〈ユダヤ人とギリシア人の区別はありません〉**と何気なく書かれているようにも思えますが、ユダヤ人がイエスをメシア（＝キリスト）と信じるのがむずかしいのと同じように、ギリシア人がキリストを信じるのもむずかしかったと思います。ユダヤ人に長い歴史があるのと同じく、ギリシア人には歴史と知恵があったからです。それはそれとしまして、13節です。**〈「主の御名を呼び求める者はみな救われる」のです。〉**と、パウロは、ヨエル書のことばを引いて語っています。人が、キリストを信じることによって救われるのは神のわざです。現に、熱烈なユダヤ教徒であったパウロが救われ、そして日本人である私たちが救われたのですから。ではユダヤ人が、すなわちイスラエルが救われなかったのは、どうしてなのでしょうか。伝道がなされなかったからでしょうか。とんでもありません。少なくてもパウロは、安息日ごとに会堂に入り、イエスがキリストであると伝えました。ですが、激しく反対されました。ですから、16節で語っています。**〈10・16〉**と。18節でも語っています。**〈10・18〉**と。では、なぜユダヤ人は、すなわちイスラエルは救われないのでしょうか。パウロは申命記のことばを持ちだして解き明かします。19節です。**〈10・19〉**と。さらに預言者イザヤのことばを引用して語ります。20節です。**〈10・20〉**と。そして、イスラエルに対する主のみこころを語ります。21節です。**〈そして、イスラエルのことをこう言っています。「わたしは終日、手を差し伸べた。不従順で反抗する民に対して。」〉**と。イスラエルに対することばではありますが、ユダヤ人とギリシア人の区別はありませんので、私たち日本人についても、主は**「わたしは終日、手を差し伸べた。不従順で反抗する民に対して」**と語っておられることが分かります。